

平成 22 年 5 月 18 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20720065
 研究課題名（和文）近世・近代における能楽囃子の変遷 大鼓葛野流・小鼓幸流を中心に
 研究課題名（英文）Vicissitude of Noh music between the 17th and 19th century : centering on KADONO school of knee drum and KO school of hand small drum
 研究代表者
 佐藤 和道（SATO KAZUMICHI）
 早稲田大学・演劇博物館・客員研究員
 研究者番号：50434361

研究成果の概要（和文）：早稲田大学演劇博物館・法政大学能楽研究所・盛岡中央公民館・東京藝術大学附属図書館・土佐山内家宝物資料館・金沢市立玉川図書館等に所蔵される大鼓葛野流・小鼓幸流に関する資料を網羅的に収集し、近世から近代にかけての能楽囃子の一端を明らかにした。またその過程で、大鼓役者川崎九淵の旧蔵資料のうち従来未公開の資料を発掘することができた。これは近代における能楽囃子の様相を知る上で第一級の資料である。

研究成果の概要（英文）：This is a study on musical aspects of Noh, especially two schools of Noh drum called KADONO and KO. I conducted surveys on KADONO and KO in several libraries, for example, Waseda University Theatre Museum, the Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University, Morioka Central Public Hall, Library of Tokyo National University of fine arts, Tosa Yamauchi Family Treasure and Archives, and Libraries of Kanazawa City. Through this survey, a famous drum performer, Kyu'en Kawasaki's personal diary and his musical scores are discovered. They are considered valuable historical materials to study Noh musicians in 19 century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：能楽 大鼓 小鼓 幸流 葛野流 囃子 近世 近代

1. 研究開始当初の背景

音楽劇として構成されている能においては、舞台で行われる所作や台詞と同様に、

笛・小鼓・大鼓・太鼓からなる「囃子（はやし）」が果たす役割は極めて大きい。横道萬里雄氏（『能の囃子事』東洋音楽学会編、1990年）が「謡だけでは表現し得ない能全体の性

格を決定づける重要な要素」と規定された如く、「囃子」は、舞台状況や登場人物の心境の表現、舞事や働事などの具体的な所作を演出する上で不可欠な要素といえる。

その反面、囃子やその演奏者である「囃子方(はやしかた)」については、必ずしも十分に研究されているとはいえない。従来の研究では、大きく分けて音楽的側面からの研究と、歴史的な側面からのものに大別されるが、前者については、横道萬里雄氏を中心に、主として現在演奏されている囃子の整理・分類が行われ、その成果は『岩波講座能狂言』「能の構造と技法」や「別巻 能楽図説」等に集大成されている。一方、後者については、伊藤正義氏「大鼓小鼓 大倉家系譜稿」(「神戸女子大学紀要」26)や、表章氏「大鼓金春流考(上・中・下)」(「能楽研究」23~27)等の成果があるが、研究の絶対数が少なく、分野も自ずと限定的なものに留まっている。さらに、囃子の音楽面の変遷といった、両者を結びつけた研究もほとんど行われていない。

その原因として、第一に、囃子方がシテ方を中心とする演能集団において、付随的な存在としてみなされており、主たる研究対象とはなり難い状況にあったことが考えられる。また、第二には、小鼓や大鼓といった楽器や、それを演奏するための手附(てつけ)と呼ばれる譜面を理解するためには、実地訓練を通してそれらを理解するための専門的知識を獲得する必要があり、一般の研究者にとってもそれらを十分に理解するのは困難であったことが挙げられよう。

そうした課題を打開するため、本研究では諸機関に所蔵される囃子関係資料の内、大鼓・小鼓の譜面である手附の網羅的な収集と、それらの比較研究を構想した。現行の大鼓には、大倉(おおくら)・高安(たかやす)・石井(いしい)・観世(かんぜ)・葛野の五流が、小鼓には、大倉・観世・幸(こう)・幸清(こうせい)の四流があるが、近世・近代を通じてそれらの中心的地位を占めていたのが、大鼓「葛野流」と小鼓「幸流(こうりゅう)」の二流であった。特に近世には、役者の半数近くを両流儀が占めていたともいわれる。つまり、この両者の研究が、大鼓、小鼓全体の解明の足掛りとなることが期待できる。さらに、能全体の進行の中核を担う、大鼓・小鼓に関する研究成果は、ひいては囃子方全体の様相解明にもつながると考えられるのである。

2. 研究の目的

本研究では、主に大鼓葛野流と小鼓幸流について、両者の近世から近代にかけての成立・発展の様相を明らかにすることを目的と

する。その具体的な内容は大きく分けて以下の3点に集約される。

(1) 大鼓葛野流については、明治から昭和にかけて流儀の重鎮として活躍した川崎九淵(かわさききゅうえん)の旧蔵資料の調査が中心である。この中には、明治期に葛野家より購入した資料や、九淵の師で弘前藩の御抱役者であった津村又喜(つむらまたき)の旧蔵資料なども含まれており、近世・近代における葛野流の実態を把握する上で極めて重要な意味がある。同資料の全容を把握すると共に、地方の図書館や文書館等に残存する、葛野流関係の資料を網羅的に収集することで流儀全体の実態を把握することが可能となる。以上の調査に基づき、近世以後、大鼓の最大流派であった葛野流の実態を解明することで、能楽大鼓全体の様相を明らかにすることが本研究の第一の目的である。

(2) 小鼓についても、やはり最大流派であった幸流関係資料の調査を通じて、近世以後の小鼓全体の様相の解明することが目的となる。小鼓幸流については、法政大学能楽研究所のほか、宮内庁書陵部、東京藝術大学付属図書館、土佐山内家宝物資料館などに膨大な資料が残されていることが知られており、網羅的な調査を実施すれば、流儀の様相の多くが明らかになると期待できる。特に幸五郎次郎流、幸清次郎流の両流未分化の時代から、次第に独自色を打ち出していくことになる後代の資料を比較することで、両流の成立と発展の様相を明らかにしたい。また、明治の混乱期に宗家が断絶し、加賀藩お抱えであった三須家が宗家を継承したため、現在の幸流の芸系は三須家のそれに近く、本来の系統とは異なっている可能性がある。近世後期の資料との比較を通して、現代における幸流発展の様相も明らかになると期待されよう。

(3) さらに、葛野流関係資料の調査成果と幸流関係資料の調査結果を突き合わせることで、大鼓・小鼓の相互の影響関係について明らかにすることも目的の一つである。大鼓葛野流と小鼓幸流とは関係が密であることが知られており、幸流の伝書中に葛野流の伝承についての言及が多く見られるなど、両者の接点はかなり古い段階から存在していたと考えられる。それぞれの資料中に記された他流儀に関する演出注記を調査することで、囃子方相互の関係が解明していきたいと考えている。

3. 研究の方法

資料を所蔵する関係諸機関(図書館・博物館・大学等)に赴き、現物資料の写真撮影・

マイクロフィルム等の複写を行うことが調査の主体となる。そうした調査によって得られた資料に基づいて、大鼓・小鼓の変遷を説明することが本研究の方法である。実際の調査の概要は以下のとおりである。

(1) 大鼓葛野流関係資料の調査については、早稲田大学演劇博物館の川崎九淵旧蔵資料(葛野家旧蔵資料、津村又喜旧蔵資料等約300点)・法政大学能楽研究所(『葛野流大鼓伝書拍子口之巻』、『葛野流太鼓秘事』、『幸流大鼓付唱歌』、『葛野流小鼓付』)・盛岡中央公民館(南部家旧蔵資料、『一調賦附』)ほか約50点)・宮城県図書館伊達文庫・金沢市立玉川図書館藤本文庫を対象とした。いずれも現地に赴き、現物の撮影を行った。また、一部現物の所在が確認できなかったものは、マイクロフィルムからの複写を行った。

(2)(1)のうち、演劇博物館川崎九淵資料調査の過程で、九淵自筆日記・演能記録等の存在を知ることとなった。九淵令孫の川崎肇氏宅に赴き、現物の調査を実施した。2008年12月に同資料が演劇博物館に寄贈された後は、同館にて調査を継続した。

(3) 小鼓幸流関係の調査については、東京藝術大学附属図書館(『幸流小鼓手寄』、『幸流小鼓秘事』、『幸流小鼓法格秘事』)・法政大学能楽研究所(『天保三年/幸流小鼓附并服』、『小鼓一調替手/幸上席次席流相傳扣』、『小鼓謠傳書』、『小鼓口傳集』、『小鼓手扣替習事』、『幸流頭附一調謠廿一番』、『一調十一番手附』、『幸流能秘傳』、『幸流手打様書付』、『幸流小鼓舞頭附』)・金沢市立玉川図書館加越能文庫・藤本文庫を対象とした。また、土佐山内家宝物資料館所蔵資料(『小鼓手附』、『幸流鼓手附』、『幸流小鼓附』、『幸流小鼓頭附』)については、現物の閲覧が困難であるため、国文学研究資料館に所蔵されている高知県立図書館旧山内文庫のマイクロフィルムを利用し、調査を実施した。

4. 研究成果

研究成果として以下の5点が挙げられる。

(1) 調査によって、公共図書館・資料館に所蔵される大鼓葛野流に関する資料について、ほぼ網羅的に調査をすることができたと考えられる。全国各地に散在する能楽囃子関係の諸資料を、網羅的に収集し比較検討することは、従来の研究でほとんど行われておらず、その内実についても不明な点が多かった。しかし今回の調査によって、例えば目録上では、単に「謠本」としか記載されていない資料の中に、謠本に囃子の譜を記載した「手付」

が含まれていることが判明した。特に盛岡中央公民館に所蔵される南部家旧蔵資料は、幕末の藩主南部利剛が、八世葛野流宗家の葛野定延の持っていた手付を書写したもので、手付としては第一級のものである。また、同資料は、明治期に川崎九淵によって参照され、手付の再編に使用されたことが明らかとなった。近世後期から近代にかけて、葛野流大鼓がどのように変遷したのかを具体的に知ることのできる貴重な資料であり、今後も考察の余地が残されている。

(2) 演劇博物館に所蔵される川崎九淵旧蔵資料の調査の過程で、九淵の令孫に当たる川崎肇氏より、家蔵の九淵の日記・演能記録類の存在を知ることができた。九淵旧蔵資料の大部分は1999年に早稲田大学演劇博物館に寄贈されていたが、今回明らかになった資料は、その寄贈分から漏れていたものである。このうち演能記録は、九淵が最も充実していた昭和初期のものであり、九淵の事績や能の演出研究上極めて価値の高いものである。また、自筆の日記は、戦前・戦中期から死の直前に至るもので、戦中の混乱期の能界の様相や、戦後、芸術院会員や人間国宝となってその業績が顕彰されていく晩年期の事績を知る上で極めて価値が高い。これらの資料については、『演劇研究32号』に「川崎九淵旧蔵資料追加寄贈目録 附「川崎九淵日記抄」としてその全容を報告している。特に2010年は九淵の没後五十年に当たり、この際に寄贈された資料が演劇博物館でも初めて一般に公開されることとなっており(「川崎九淵 五十回忌記念展 よみがえる名人の芸～愛蔵の鼓胴を中心に～」2010年5月22日～2010年8月2日)、没後五十年を経た九淵を再評価する意味でも意義深い発見といえよう。日記については戦前・戦中期の一部を翻刻し、内容を公開することができたが、戦後の分や演能記録の精査については、今後の課題となる。

(3) 小鼓幸流に関しては、早稲田大学演劇博物館・東京藝術大学附属図書館・法政大学能楽研究所・土佐山内家宝物資料館の所蔵資料について調査を実施した。このうち、土佐山内家宝物資料館については、現物資料の撮影許諾を得ることが困難であることが判明したため、現地調査を断念し、国文学研究資料館に所蔵されるマイクロフィルムの複写に計画を変更した。国文学研究資料館は、当該資料が高知県立図書館に山内文庫として所蔵されていた際にマイクロ化を行っており、これによってその全容を把握することが可能である。その結果、やはり目録上は単に謠本と記載されている資料の多くに、幸流の手付が記入されていることが明らかとなっ

た。土佐藩の役者については、宝暦版『能之訓蒙図彙』に関口・古春・嶋村・前川などの名が小鼓幸流として挙がっており、その関係が推測される。内容に関する詳細な検討は、今後の課題としたい。

(4) 金沢市立玉川図書館の加越能文庫及び藤本文庫に所蔵される加賀藩関係資料の調査を実施し、その調査結果の一部を2009年9月の東海能楽研究会における口頭発表「初代万蔵の初舞台 享保期加賀藩の能」として発表した。

(5) 近代における能楽離子の様相を明らかにするべく、論考「伝統芸能になった能楽 明治期における享受者の変遷をめぐって」を『演劇映像学2009』(早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム・2010年3月発行)に発表した。本稿は、明治期における能の享受者の変容を同時期の西欧音楽等の状況と比較しながら考察するもので、近代における能楽のカノン化や、明治後期における離子方養成事業とも密接な関係を持つ。本研究課題の中間報告的な意義を持ち、また「現代における能楽」という、今後の研究課題にも繋がる成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

佐藤和道、「伝統芸能」になった能楽 明治期における享受者の変遷をめぐって、演劇映像学 2009、査読有、第4集、2010年、pp.45-p.65

佐藤和道、川崎九淵旧蔵資料追加寄贈目録 附「川崎九淵日記抄」、演劇研究、査読無、32号、2009年、pp.243-279

[学会発表](計1件)

佐藤和道、初代万蔵の初舞台 享保期加賀藩の能、東海能楽研究会例会、2009年9月20日、米野コミュニティーセンター(名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 和道 (SATO KAZUMICHI)
早稲田大学・演劇博物館・客員研究員
研究者番号： 50434361